世界を救ったその後で

まーなー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
世界を救ったその後で

【Ｎコード】
Ｎ７６３２Ｕ

【作者名】
まーなー

【あらすじ】
異世界に召喚されて人間界、天界、魔界全てを救ったお人好しな平凡高校生邑瀬竜司君。
めでたしめでたしで帰って来た……はずなのに、姿も力も異世界の時のまま！
一体全体どういうことなのさ！？
いや、これはチャンスだ！
ジミーでボッチな自分を変えるチャンスなのだ！
異世界で手に入れた暴君スキルと、絶世の美貌と、世界を滅ぼし得

る力でリア充街道まっしぐらだ！
目指せ友達百人！
そんなお話です。

絶対なる紅

アブソリュート・クリムゾン（絶対なる紅）

何時からか、誰からかは分からないが、誰もが彼の者に畏怖を抱いてそう呼んだ。

戦場では、ただ一人で万軍を殲滅し、不落の城を蹂躙し、魔を殺戮した。

その美貌は、性どころか種すらをも超越し、全てを惑わし、狂わせ、堕落へと導いた。

敵を滅ぼし、弱きを護り、全てを飲み込まんとする「歪み」をも討ち、世界を救った絶対者は、そして神話の彼方へと消えていった……。

物語はそこから始まる。

世界を救ったその夜に

邑瀬　竜司は自室のベッドの上で目を覚ますと、時計を見た。
最近買った電波時計は、デジタル表示を無機質に映し出している。
それから見慣れた自室を見渡し、込み上げてくる激情を感じた。
帰って来た。
帰って来たんだ。
寂しさや、喪失感もあるが、嬉しさが勝り、ガッツポーズしようと上体を起こして、そこで気付いてしまった。
腰まで届く、燃えるように紅い髪。
人間離れした美貌。
すらりと引き締まっていながら、出る部分は十分に育った肢体。
ドレスのようなデザインのやはり真紅の甲冑。
そして、轟音と共に床に倒れた、人の背丈を超える巨大な真紅の大剣。

「な…な……な！」

上手く言葉を発することが出来ず、どもりながら自分の体を触る。

「伝説が終われば、歴史が始まる」

そんな竜司の横から、面白がっているとすぐに分かる、男性の声が聞こえてきた。
机の上に、上等な毛並の黒猫が一匹、ニヤニヤした笑みを浮かべながら座っている。

「さぁ、歴史を刻んで行こうではないか、アブソリュート・クリムゾン」

悪魔ニコラウスの笑顔を見て、竜司は頭を抱えるしかなかった。

数分後、場所は邑瀬家の居間に移る。
畳の上に正座する竜司と、ちゃぶ台を挟んで男性が胡座をかいている。
生え際がかなり後退した頭に、眼鏡をかけた痩せ気味の中年。
竜司の父、拓哉だ。
剣が倒れた際の音で起きたらしく、慌てて部屋にやって来て今の竜司を見付けてしまったのだ。
その姿を見て、普段は怒ることを忘れているかのような温厚な彼が、肩を震わせながら涙をこぼしている。

「僕はね、竜司、別に女装に怒ってる訳じゃないんだよ。驚いたけど、そう言うのは個人の趣味だから。猫を拾って来たのだって構わないさ、自分で世話をするのならね。でも……でもね」

しゃくりあげ、精一杯鋭い目をして竜司を睨み付ける。

「お母さんにもらった体にメスを入れるとはどういうことだっ！！」

声を裏返しながら、拓哉が慟哭する。
父の言う通りだ。
どんな理由があれ、親にもらった大事な体を弄ってしまった。
謝ろう。
そう、竜司が思った矢先、ニコラウスがちゃぶ台に飛び乗った。

「お父上殿、貴方の言い分はごもっとも、反論のしようがございません。しかし、彼には彼なりの事情があるのです。どうか、話を聞いて頂けないでしょうか？」

「！？」

突然猫が喋り出したものだから、拓哉は当然目を見開いて固まってしまった。

しかし、そんな拓哉を無視してニコラウスの弁護は続いている。

「実は、以前私の故郷が非常に重大な危機にさらされていまして、その時ご子息のお力を借りたのです。本来ならばただの人間であるご子息は魔力に変換され魔器の燃料となるはずだったのですが、彼は魔力に変換された状態からアストラル体に変化し、魔器や近くに封印されていたドラゴンと融合してしまいました。その際に再び実体化させるために魔石を媒体にした結果、このような姿になりました。ご子息の現在の容姿に関しては、全ての責任が私にあります」

突然の喋る猫の乱入に、拓哉は唖然としてしまった。

しばらく困惑した様子だったが、持ち直してニコラウスと正面から向き合う。

「つまり、息子は自分から望んで女性になった訳ではないと？」

「その通りです。女性になってからも多少腐りはしましたが、悲観することはなく、私共の故郷を救うのに快く協力してくださいました。おかげで万単位で命が救われたのです。ですから、どうかご子息を責めないで頂きたい」

「そうでしたか」

拓哉は半分も理解していないようだったが、それでも理解しようと頭を働かせている。

「竜司、お前はどうなんだ？」

少し考えてから、竜司は顔を上げた。

「俺は、こんなんもありかなって思ってる。確かに普通は有り得ないし変なことなんだろうけど、向こうの三年間も俺の経験だし。いや、こっちでは一瞬だけどさ。それに、今の恰好も意外と気に入ってるし……さ」

「そうか、分かったよ。君がそう言うのなら僕も出来る限りの協力は惜しまないよ」

「悪いな、親父」

「気にしないで、父親として当然だよ。ただ、また今度分かりやすいように説明してもらうからね？」

「あぁ」

二人で顔を見合わせ、苦笑し合う。

「所で竜司？学校はどうするんだ？」

「あ……」

呆然としてしまった竜司を見て、コラウスはニヤニヤと笑みを浮か

べていた。

平凡と日常と（前書き）

挨拶が遅れました、まーなーと申します。
こんなん読みたいなと思った妄想をカタチにしただけの拙い文ですが、よかったら読んでって下さい。

平凡と日常と

宮龍院学園高校棟２年７組教室
朝の教室の喧騒の中、文庫本を読む竜司の姿があった。

（意外と何とかなるもんだな）

そう内心呟いて、小さく嘆息する竜司。
幸か不幸か彼…彼女は高校初期の友人作りに失敗し、それ以来まともに友人を作れずに二年生になってしまっている。
教室での彼女の存在は空気であり、誰からも気にされない存在であった。
「以前と同じ」に見えるようにする幻覚魔術を使っていると言っても、強く意識されて視認されれば本性を暴かれてしまう。
周囲の竜司に対する反応が変わっていないのを見ると、魔術は滞りなく発動していて、かついつもと変わらず彼女は気にもされていないようだ。
ホッとするやら虚しいやら、竜司の内心は複雑である。

（それにしても、意外とコチラも魔力を持つ者が多いんだね？）

そんな彼女に、木の枝に座りながら窓の外から教室を眺めているニコラウスが念話で話し掛けてくる。
彼の言葉が示す通り、コチラにも魔力の存在が感知出来た。
どうやら竜司が知らなかっただけで、世界は意外と混沌としているらしい。

（持ってることに気付いてる奴はいないけどなー）

竜司は欠伸をしながら、わざとらしいくらいに気のない返答をする。
いや、実際何かを誤魔化そうとしていた。
当然、悪魔にそんな誤魔化しは通用しない。

（それにしても、君の後ろの席の彼はやけに美味しそうな魔力をしているじゃないか）

（……考えないようにしてたのに）

声音からして心底愉しそうなニコラウスに、竜司は溜め息混じりに答えた。
現在の竜司は、言うまでもなく人外寄りの存在だ。
魔力を食み、血を浴び、殺戮を好むバケモノだ。
彼女がどう考えようが、彼女と人間の関係は良くて捕食者と獲物でしかない。
そこら辺の人間の魔力ならハッキリ言って十把一絡げであり食指が動くこともないが、中には極上のご馳走にしか見えないような者もいる。
そう、例えば後ろの席の彼のように。

宮龍院学園高校棟屋上
開放こそされているが、昼食時にはほとんど誰かが来ることはない。
一人になるには絶好の場所だ。
幻覚魔術を解いて、ついでに後頭部で纏めていた髪もほどく。
そんなホッとした顔の竜司を、ニヤニヤと不気味な笑みを浮かべながら見上げるニコラウス。

「食べないのかね？彼を」

「食べない」

あんパンの包装を破りながら、淡白に答える竜司。
ちなみに、魔力を食べると言っても食料を経口摂取するのとは違う。
中には、対象を頭からバリバリムシャムシャしてしまう奴もいるが、
大体は吸血や粘膜、皮膚接触だ。
レベルが高いと対象を視認するだけで魔力を吸いとれる、なんて輩
もいるが。

「アチラでは平気で食べていたのにかい？」

ニコラウスは笑みを濃くしながら尋ねる。

「あのな、ニコル」

竜司はあんパンを口から離すと、少し怒ったようにニコラウスを見
下ろす。

「俺があいつらを食べたのはあいつらが俺の敵だったからだ。と言
うか、お前分かってて言ってるだろ？」

「あぁ、分かっているとも。しかしだね、出来ることをしないのは
怠惰ではないか？」

「やらなくていいことをやらないのは怠惰とは言わないよな」

ニコラウスが黙ったのを確認した竜司は、今度こそあんパンを食べ
始めた。

（確か二階堂　信……だったっけ？）

あんパンを咀嚼しながら、後ろの席の人物の記憶を脳細胞の奥から引っ張り出す。

１８０ｃｍの引き締まった体にツンツン頭の整った容姿。

ただ、ひどく鋭い目付きで、睨まれたら竦み上がりそうな迫力がある人物だ。

竜司と同じく友人がいない人物だが、竜司と違って作るのに失敗したのではなく「寄らば斬る」みたいな剣呑な雰囲気を撒き散らしてわざとヒトを近寄らせなかった。

（……）

「やはり食べたくなったのだろう？」

「いい加減にしろ」

ニタニタ笑いのニコラウスを軽く蹴飛ばすと、フギャ！と悲鳴を上げて吹き飛んだ。

何の変化も無いまま１日が過ぎて、町は夜の蚊帳に包まれる。

既に人気の無くなった町を歩く竜司。

フリルが要所にあしらわれた真っ黒なドレスが、紅い髪と一緒に風に靡く。

「女性用の服装を拒否していたのが嘘のようだね」

以前を思い出したのか、肩に乗っているニコラウスが笑う。
「逆に今はそう言うのに挑戦したいと思ってるよ。別に男捨てるつもりは無いけどな」
竜司は澄まし顔のまま答える。
誤魔化しや強がりではなく、本当にそう思っているようだ。
「ある意味最高だな、美女を好き勝手に着せ替え出来るんだから」
「君も大概退廃主義的だねぇ」

ニコラウスは呆れたように言うが、笑みは消さない。
例え、目の前で血飛沫が撒き散らされていたとしても。
通算四度目になる光景が二人の前に現れる。
突然横合いから飛びかかってきたヒトの形をした何かを、竜司は手刀で切り裂く。
二つの肉塊に別れて内容物をぶちまけるソレを自然な動作で避け、気にする様子もなくのんびりと歩いて行く。
「飽きる……な」
「最初に言い出したのは君だろう?不穏な気配がする、と」
「……」
「確かにこんな非力な「影」が、どうやって具現化したのか興味はあるけどね」

ニコラウスが「影」と呼んだそれは、本来なら存在に適した環境の中にいるか、余程の念や魔力を注がれない限り実体を持ったり人を襲ったり出来る魔物ではないはずだ。
そう言う意味で非力なのであり、少なくとも猛獣程度には危険な魔物である。
その気配を感じてしまった竜司は、それらを駆除しようと一人こうして夜の町を徘徊しているのだ。
それは、竜司にとって路傍の石を蹴り飛ばしてどかすよりも簡単で、退屈な事だった。

「根本から叩かないと駄目だな。多分湧いてくるだろうし」

「問題はその根っこが何なのか……だけどね」

「まぁな」

分かりきった事を蒸し返して焦燥を煽ろうとするニコラウスに生返事して、立ち止まる。

「どうしたのかね？」

「いや、魔力と言えば……」

「あぁ、昼間の彼か」

竜司の思案を聞いて、ニコラウスも合点がいったようだ。

「アイツは何か知ってるのかな？」

竜司はそう呟いてから、休憩しようと公園に足を向けた。

遡逅１（前書き）

遅くなって本当に申し訳ありません。
次回はもっと早く投稿したいと思います。

邂逅1

突然閃光に包まれて世界が回転し、一瞬で場面転換。
公園に居たはずがどこかの屋内で魔方陣の真ん中に立たされている。

（召還された……のか？）

少ない情報から今の状況を推測するに、自分は使い魔としてどこかの誰かに召還されたらしい。
こちらを服従させようと相当数術式が周囲に展開している。
これが並の人外ならば瞬く間に隷属させられただろうが、竜司を相手にするにはあまりにも貧弱過ぎた。
意識した訳ではなく反射的な抵抗で術式は全て砕け、召還主にその代償を払わせる。
本来ならその代償は魔力や魂、または存在そのものを食い尽くすといった致命的なものだったが、竜司はそれを咄嗟に痛みというカタチに変換した。
形容するなら、神経に沿って四肢の末端まで有刺鉄線を挿入されてそれを一気に引き抜かれる……とでも言えば多少は分かってもらえるかも知れない。
魂を食われるよりは生存率は高いだろうが、最悪発狂して廃人コースまっしぐらである。
案の定召還主は白眼を剥いて倒れ、激しく痙攣し始めた。
悲鳴どころか呻きすら漏らせず、体液という体液を身体中から滲ませ、激痛に失神しては激痛に叩き起こされてまた失神するという地獄のような状況に陥っている。
しばらく見ていたのだが、さすがにいたたまれなくなって召還主の側にしゃがんで額に手を当てる。
脳を魔力でちょっと弄り、痛みが治まるまで痛覚を遮断してやるこ

とにした。

「あー」

召還主が完全に意識を失ったのを確認してから、間抜けな声を上げてケータイを取り出す。
時間を確認すると公園で休憩しようとしてから三分も経っていない。

「急展開過ぎる……」

召還主の顔を見ながら、竜司は非常に率直な感想を述べた。

二階堂　信は寝返りをした際に発生した激痛で飛び起きた。
で、飛び起きた時の激痛で再び布団に倒れ込んで失神しそうになり、今度は倒れた時に発生した激痛でのたうち回った。
重度の筋肉痛と、長時間正座をした後の痺れと、剥き出しの神経をヤスリで擦られるのが同時に来るような痛みが尾を引いてなかなか治まらない。
体を丸めて耐えていると、ふと気配を感じてそちらに苦し気に視線を向けた。

「大丈夫か？」

「……」

気遣いの言葉をかけてくれたのは大人びた雰囲気の少女。

しかも、意識が飛びそうな痛みすら忘れて見蕩れてしまうほどの美貌を持った。
信は魂を抜かれたような間抜けな顔で少女を見詰めていた。

「お～い？」

少女は、全く動く気配の無い信の脇腹を突つく。

「あぎっ！？」

指先が触れると、それを決起に激痛が発生する。
短い悲鳴を上げて身を捩ると、少女はそれを見ながら溜め息を吐いた。

「俺の声、聞こえてるか？」

今度の疑問には首を縦に振って答える。

「よろしい」

少女はそれを見て頷く。

「まだ完全じゃないみたいだしもう少し寝ろ。話せるようになったら聞きたい事がある」

そう言う少女に目を覗き込まれると、信は痛みを忘れて深い眠りにつかされた。

信が寝入ったのを確認して、竜司は一息吐いた。
「やっと見付けたよ、リュウジ」
「なんだ、遅かったな？ニコルさん」
空中から現れたニコラウスを受け止めて笑顔を浮かべる。
「白々しい。君がほんの少しでも魔力を感知させてくれていれば転送された直後にでも来られたのに」
珍しいことに、ニコラウスは拗ねていた。
「お互いにクールダウンは必要だっただろ？」
「それは……まぁ、認めるよ」
信を睨み付けるように見ながら、憮然とした口調で答えるニコラウス。
どうやら竜司が誰かに召還されたという事実が非常に気に入らないらしい。
もし召還直後に来ていたらニコラウスは信を殺していたに違いない。
「しかしだね、たかが人間ごときに使役されそうになったのだよ？これほどの無礼は命で償ってもらっても足りないはずだ」
「別に使い魔にさせられた訳じゃないし」
「君はもう少し自覚を持ちたまえよ。もう君は人間ではないし、人間と馴れ合うべきでもない。君は支配者たる存在で……」

腕の中でそっぽを向いていつもより若干早口で話すニコラウスの頭を優しく撫でる。

「悪かったよニコル、心配かけて」

「……」

納得いかないという雰囲気と表情のニコラウスを笑顔で見下ろしながら、その喉をくすぐる。
すぐに心地好さそうに目を細めてゴロゴロと喉を鳴らし始めた。

「ま、これも何かの縁だろうし、話くらい聞いてみるさ」

「君はいつもそう言って深入りするのだけどね」

やれやれと溜め息を吐きながら、ニコラウスは呆れていた。

十分に回復した（させた）信の横で、少女は正座のまま話し始める。

「まず、お前は俺を召還して使い魔にしようとしたが失敗、代償を払わされて約３４時間ほど寝込んでいた。ここまではいいな？」

「あぁ」

何となくそんな気はしていたが、言葉にされるとショックだった。
これでも周到に用意したつもりだった。
臆病と言ってもいいくらいに。
三重の対物理結界、四重の対魔術結界、三重の魔力吸収陣、五個の隷属強制術、そして対呪魔石と呪い返しの結界。
召還魔方陣以外はどれもこれも自分で用意したモノではないが、だからこそ一流レベルのはずだった。
それが一瞬で、完全に、いともあっさりと破られてしまった。
経験が浅い彼でも十分理解できる。
目の前の少女はバケモノだ。

「それで…だ、何で使い魔が欲しいんだ？」

「何でって……」

予想外の質問に信は狼狽えた。
少女の意図を計りかねて疑問符が頭を埋め尽くす。
そんな信の内心を察したのか、少女は目をすがめながらも再度質問してくる。

「もう少し突っ込んで聞こうか。何であんな身の丈に合わない高レベルの召還をしたんだ？」

「それは……」

凶悪なまでに鋭い目が獲物を探すように周囲を見回す。
本当はただ泳いでいるだけだが、傍目から見ればそう見えた。
少女はそれを恐がるでもなく、急かすこともせず、気分を害した様子もなくただ待っている。
しばらく目を泳がせていた信だが、観念したように口を開いた。

「強くなりたいんだ……」

「強く？」

おうむ返しに聞いている少女に、頷いて肯定の意を伝える。

「俺はどうしても強くならないといけないんだ」

「なぜ？」

そう聞いてきた少女だが、答えには期待していないようだった。
再び目を泳がせ始めた信を見て腕を組む。

「質問を変えよう。どういう強さが欲しいんだ？」

少女の質問に、信はさらに狼狽えた。
どういう強さなんて決まっている。
俺の欲しい強さは……強さは……？

「俺を使い魔にしてもお前自身は少しも変わらない。それでいいのか？」

即答どころかマトモな答すら出てこない。
信は呆然とするしかなかった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7632u/

世界を救ったその後で

2011年10月2日11時48分発行